

〈声〉の採集者列伝  
聞き手たちの時代

武藤 鉄城

## 声の〈向こう側〉から昔話を分類する

— 武藤鉄城「羽後角館地方昔話集」の方法 —

飯倉 義之

### 1 角館の名士・ダンディ・武藤鉄城

武藤鉄城（一八九六一—九五〇）。むとう・てつじょうと読む。本名である。知人は鉄城を「あらゆる意味においてのよきコレクター」であり、エネルギーシユな記録者でもあり、それらの中央学会への提供者であったわけで、地方の民俗学徒としての一つの典型<sup>1)</sup>。「富木一九六二」、「帽子、服、ネクタイは言うに及ばず、ほとんど外国製のもので身を固めていた」「慶応ボーイのダンディ」「太田一九七五」と振り返る。

民俗学史上では鉄城は、アチックミュージアムへの資料提供者、特にマタギ資料の報告者として知られる。没後に刊行された『秋田マタギ聞書』<sup>2)</sup>「武藤一九六四」の著者として、もしくは高橋文太郎『秋田マタギ資料』<sup>3)</sup>「高橋一九三七」の共同採訪者として、または『羽後角館地方に於ける鳥獣草木の民俗学的資料』<sup>4)</sup>「武藤一九三五」<sup>5)</sup>「秋田郡邑魚譚」<sup>6)</sup>「武藤一九四〇」を

報告した秋田県在住の民俗研究者として想起される。口承文芸研究者にとつての鉄城は、佐々木喜善「聴耳草紙」<sup>7)</sup>「佐々木一九三一」への資料提供者、もしくは『旅と伝説』誌上に「羽後角館地方昔話集」<sup>8)</sup>「武藤一九四一b」という卓越した量の昔話を報告した精力的なフィールドワーカーとして思い出される存在だろう。だが、鉄城がその昔話集で独自の分類法を提唱していたことは、研究史上に特筆されることではなかった。

そして、『日本大百科全書』（小学館）や『日本人名大辞典』（講談社）掲載の「武藤鉄城」の項では、魚形線刻石や環状列石発掘の考古学調査、マタギ習俗や昔話等の民俗研究、スキーやラグビーの普及指導等の多岐にわたる功績が挙げられ、県文化財専門委員、県文化功労章、県スポーツ功労賞といった戦歴・受章歴が強調される。鉄城が活躍した角館町が合併し仙北市となった際、角館の新潮社記念文学館が行なった仙北市誕生企画展は「武藤鉄城の世界」であった<sup>9)</sup>。秋田において、また角館において、鉄城は現在でも多方面で重要な先達の一人である。

こうした鉄城の多彩な活躍は、秋田文化出版社から刊行予定だった『武藤鉄城著作集』（全八巻・別巻一）にも見て取れる。同集の刊行は第一巻「武藤一九八四」<sup>3</sup>をもって中絶したが、同社の「出版案内」等から刊行計画は確認できる。同集は以下の内容を予定していたようだ。

①鳥の民俗・木の民俗／②草の民俗・虫の民俗／③秋田のマガギ／④雪と民俗／⑤笹良舞考／⑥考古異観／⑦秋田農民一揆史／⑧スキー・ラグビー・ホッケー創生史／別巻 武藤鉄城研究

同集予告に「全巻予約者に復刻『秋田キリシタン史』進呈」とあるため、実質全十巻の刊行計画であった。民俗・考古・中近世史・スポーツと、鉄城の功績を満遍なくカバーした巻立てである。鉄城の昔話採集に一卷を割いていないのは、未刊論文・草稿の発掘に主眼を置く編集方針から、昔話については『全国昔話資料集成12 角館昔話集』『武藤一九七五』に譲ったと考えられる。著作集の刊行中絶後、別巻に当たる稲雄次「武藤鉄城研究」<sup>4</sup>「稲一九九三」のみ単著として刊行された。鉄城の年譜・著作については同書が最も精緻である。

本稿では稲の同書に依りつつも、前掲の富木友治や太田雄治の回想や、富木耐一「解説」「富木一九八四」を参考に鉄城の学問形成の後を辿り、それらを踏まえて鉄城の構想した「新たな分類法」の意義を確認したい。

## 2 武藤鉄城の学問形成

武藤鉄城の経歴は紆余曲折に満ちている。鉄城は一八九六年四月二〇日、秋田県河辺郡豊岩村（現・秋田市豊岩）に、地主で素封家の武藤家の四男として生まれた。鉄城は「テツシロウ」の意味もこめての命名という。

県立秋田中学校時代に長兄・一郎（のち豊岩村長）の影響で考古学に興味を持ち、土器の発掘等を行なっている。一九一四年、慶應義塾大学予科に入学。スポーツ万能の鉄城は慶應時代、ホッケー・ラグビー・スキーに熱中した。一九一八年、同大本科を退学。しかし東京遊学は一九二〇年の帰郷まで続行される。

一九二二年、羽後銀行に入行、教員であるヒデと結婚。このころ、長兄とともに東京人類学会に入会している。翌年、秋田運動倶楽部を結成、県内ラグビー大会開催に尽力。同時期に仙北郡のスキー倶楽部に指導者として出向している。一九二五年、銀行を退職し鉄城運動具店を開店するも、借入金のトラブルから二ヶ月で閉店となる。翌年、スキー倶楽部の縁で、第二の故郷となる角館町（現・仙北市）に移住、角館尋常高等小学校の代用教員となる。鉄城は生徒に昔話を集めさせ、結成した角館史考会では古文書調査に熱中した。

一九二八年は秋田県の民俗学出発の年といわれている。この年、県内二箇所「菅江真澄百年祭」が営まれた。真澄活躍の

地・秋田市では柳田國男の講演が行われ、真澄終焉の地・角館には喜田貞吉が講演に訪れた。鉄城は翌年、喜田に招かれて東北帝国大学の奥羽史料調査部嘱託となり、仙台に単身移住。当時、同調査部は雑誌『東北文化研究』を刊行するなど、東北地方における考古学・人類学研究のセンターとなっていた。この仙台時代に佐々木喜善と結んだ親交が、『聴耳草紙』への昔話資料の提供に繋がってゆく。

一九三〇年、帰角。角館高等女学校の課外活動指導者となるも実質無職の鉄城は、民俗採集に熱意を注ぐ。鉄城の名はこの頃より『郷土研究』『旅と伝説』に現れ始める。その一方で、家計は妻の教職の俸給のみの切迫した状態にあった。一九三二年、『聴耳草紙』に自身が報告した昔話が掲載されたことは、そんな鉄城の励みとなっただろう。同年、草稿『角館昔話集』一卷が成稿。一九三二年に鉄城は洪沢敬三の知遇を得る。翌年、翌々年とアチックミュージ엄同人の探訪旅行に同道し、早川孝太郎、高橋文太郎らと親交を深めた。

一九三四年十二月、『旅と伝説』七巻十二号の昔話特集に鉄城の『角館地方昔話四話』も掲載された。同年に草稿『角館昔話集』全四巻が成稿している。この時点で鉄城は、角館での昔話採集の完成を感じていただろう。

一九三五年、『羽後角館地方に於ける鳥獣草木の民俗学的資料』の刊行と前後して鉄城は、アチックミュージ엄に草稿『角館昔話集』を送る。四巻で五百余話の昔話が収録されていたこ

の草稿は、しかし柳田國男が疑義を呈したことから没となってしまふ。特に年若い太田雄治が一人で百話近くの話者となり、その中に芝居や創作の影響を受けた語りがあることに柳田は疑いを抱いたようだ。この柳田のまなざしは鉄城にも強く堪えられない。六年後に『旅と伝説』誌上に活字化される「昔話の終り」及び「羽後角館地方昔話集」(一)(二)「武藤一九四一a b」では、太田の報告は注意深く削られている。<sup>5)</sup>

一九三八年、鉄城は朝日新聞の地方通信員に、次いで角館時報社の記者となる。長い無職時代の終焉である。一九四〇年、『秋田郡邑魚譚』刊行。そうして一九四一年、百九十一話に再編集されていた角館昔話集草稿は、『旅と伝説』十四巻五号・六号「羽後角館地方昔話集」(一)(二)「武藤 一九四一b」として日の目を見る。<sup>6)</sup>この二編の公刊で鉄城の昔話研究は幕を閉じる。

一九四五年、敗戦後、鉄城は角館中学校講師となるも翌年退職、角館時報社社長として活躍する。一九五一年、秋田県文化財専門委員に。環状列石発掘への参加など、考古学調査が鉄城の戦後の主要な功績である。一九五六年八月二〇日、没。胃瘻であったが、本人は熊の肉に当たったと信じていた。

野村純一はこうした鉄城の学問上の性癖を以下のように概括している。

いったいに、角館在住の鉄城がその土地に根差して、考古学、地方史、民俗といったように幅のある活躍を示し、多くの業績を残したのは、よく知られているところである。しかして鉄城

の仕事振りは、ある時期に擲り出て特定の分野に精力を集中し、一時を経るとやがて他に興味を移す、という特異な趣にあった。

〔野村一九七五〕

当を得た解釈といえる。鉄城の昔話採集は、代用教員時代から角館昔話集草稿完成までの約十年に集中している。鉄城の活動を振り返ると、大正後期のスポーツ普及活動、昭和初年からの昔話採集、アチック同人との出会い以降のマタギ習俗調査、戦後の遺跡発掘と、十年ほどの幅で興味の軸を移していることがわかる。アチックミュージアムに送られた昔話集が鉄城自身の手によって改編され、草稿も現存しない以上、「羽後角館地方昔話集」(一)(二)〔武藤一九四一b〕を鉄城の昔話研究の到達点としてよいだろう。鉄城は角館の昔話をどのように見ようとしていたのか。

### 3 昔話の「別の分類法」

鉄城の「羽後角館地方昔話集」(一)(二)〔武藤一九四一b〕は、(一)百話、(二)八十四話、計百八十四話の昔話を収録する。いずれも語り口は共通語に直され、民俗語彙や方言を活かした記述はなされていない。しかしこれは録音技術を用いない当時<sup>(7)</sup>にあつては標準的な昔話の資料報告である。鉄城の「声の採集」の独自性は、採集法や記述法にではなくその分類にあつた。

鉄城は序文で自らの分類法についてまとめている。少し長い

が、全文を引用しよう。

私は此の昔話集で、従来人々に依つて試みられてゐるものとは別の分類法を行つた。即ち話の主人公に依つて、和尚譚、小僧譚、継子譚等に區別したりするものとは相違して、その話が何を語らんとしてゐるか、と謂ふ、その内容目的に重きを置いて分類してみたのである。

隨つて、従来單に笑話として片付けられてゐた馬鹿婿馬鹿嫁の話でも、『さういふ馬鹿な眞似はするものでないぞ』といふ教訓の意味あるものとして取扱つたわけである。然し、又中にはどちらにも入るといふ性質のものも少くない。そうしたものは勿論、色彩が濃く、そして秤量の重い方へ屬せしめたこと云ふまでもない。

話者は聴手から特別註文のない限り、語らんとする時「笑はしてやらう」とか、「怖はがらしてやらう」とか或は、「又教訓を與へてやらう」とかの心構えが利那的にもある筈である。私はその點を覗つたのである。

然し假令語り手が、さうした意識なく口から出まかせに語つたとしてもよい。私達はそれが聴手にどう響くかを觀察し、それをその話の内容目的としても不可ではないと思ふ。

とにかく私は、その話が何を語らんとしてゐるかの目的探索に努めて、この分類を行つてみたのである。

〔武藤一九四一b〕

「従来」の「話の主人公に依」る方法を退けて鉄城が採つた「内

内容的に重きを置いた分類とは、「○教訓話」「○出世話」「○報恩話」「○笑話」「○説明話」「○怪異話」「○話の終」の七項目に昔話を登録する方法であった。

『日本昔話大成』「関ほか一九七八〜八〇」の分類項目と比較して、鉄城の分類を整理してみよう。「○教訓話」は教訓を伝える意義を含んだ昔話で、「動物競争」や「隣の爺」「愚か智」「愚か嫁」を中心に「だから、あんまり欲張るもんでない」と。なあ。」といった結語をもつ話を収める。「○出世話」は主人公が福徳を得て終わる話で、「運命と致富」や「呪宝譚」「難題智」が多い。「○報恩話」は「動物報恩」と「異類女房」を中心に、一七六「奈良梨採り」のような親孝行が語られる昔話を収める。「○笑話」には愚か智・愚か嫁以外の笑話が、「○説明話」には「小鳥前生」等の動物昔話が多く収められている。「○怪異話」には「人と狐」「愚かな動物」「逃竄譚」と「異類智」に対応する。「○話の終」は「形式譚」である。

この「話の内容的」による分類は、話が「聴手にどう響くか」を主眼に昔話を分類する試みであった。『日本昔話大成』や『日本昔話名彙』「柳田一九四八」等の「話型索引」<sup>ウイブライニングデクス</sup>が、全国（あるいは国外まで）を俯瞰する昔話の分布を地図上に表わし、その偏差を分析してゆくという歴史地理学的方法に基づいた分類であるに対し、鉄城の分類は角館という地域の内部で、昔話が語り手と聴き手の間でいかなる位相にあるのか（怖がらせる話・楽しませる話・教訓話・説明話……）に注目した、語りの〈場〉

における「声」、昔話を聴く「耳」・感じる「身体」に基づいた分類といえる。

ここには鉄城の昔話観が強く反映している。鉄城は民間説話を、民俗事象から独立して記述しうる言語芸術とは考えていなかったようだ。例えば鉄城は『武藤鉄城著作集Ⅰ 鳥・木の民俗』の「ウケイス」の項目で昔話を次のように記述する。

#### 《ホケチヨ鳥コ》

ホーホケチヨの鳴音を短縮しての、ホケチヨ鳥コである。（……中略。鶯の小鳥前生譚、「鶯言葉」の笑話を紹介……）それから又、鶯は常に人間と親密なので、人間の気付かぬことを、警告したりする。

瓜子姫を殺し、その面の皮を剥いで姫に化けたアマノジャクが駕籠へ乗ろうとした時、鶯が、

「瓜子姫の乗り駕籠さ アマノジャク乗って行った  
ホーホケチヨ」

と告げたと語る昔話もそれである。そうした仲であるので、昔から、鶯を捕るとその家の人がその年のうち死ぬとか、稲も不作になるとか戒められ保護されていたのである。

雪国では、この鳥が鳴くと、氷餅を食べてもよいなどという。今日のようなお菓子のなかった時代には、氷餅は上等の菓子であった故、子供達に無闇に食われないように制限を設けたのかもしれない。そうした地方では雪消えて間もなく咲く、白と薄紫の花を「ホケチヨの花」といつている。

待望の早春に鳴く鳥と、その頃咲く花と関連を持つこと、もつともなことである。「武藤一九八四」

鶯と人間の親密な関わりの顕在化が昔話「瓜子姫」であり、その昔話の鶯と、俗信の鶯や民間暦に現れた鶯を切り離して考えることはできないと、鉄城は見る。鉄城のこうしたまなざしからの昔話分類は、全国を一冊の書物であるかのように読もうとする「話型分類」からは見落とされがちな、生活の中の昔話のありよう、角館という文脈における昔話の動態を把握し得る、在地のまなざしからの昔話分類にもなりえたはずである。

鉄城の方法は、語り手の持つ昔話への思い入れや、語り手による昔話の演出という観点からは語り手論に、昔話を「誰が・いつ・どのように」聴くのかという問題意識からは聴き手論に、語りを〈場〉の問題として聞くという方法からは昔話の動態的分析へと通じる経路をも取り得たはずだ。しかし鉄城の昔話研究はそうした結実をすることなく、独自の分類も忘れられてしまった。

その原因の一つには、目に余る分類の不完全がある。例えば、継子が出世しない型の「継子譚」は、この分類のどこに収めていいのか、わからない。また「○説明話」の「お寺の高燈籠と篝火」は『日本昔話大成』四六四「鴨取権兵衛」に対応する話だが、最後がいかに「小僧たちがぶつけた頭から出た火がお寺の高燈籠と篝火の始まり」と事物起源になっていようととも、このような「説明」を真に受ける者は、子どもにもいないだろう。

これは「そんなばかな」という笑いを喚起するための「偽／戯／説明」であって、その意味でもこれはやはり「○笑話」とするべきだろう。

他にも「○教訓話」に収められた「六十二の祝」と「○報恩話」に排された「親捨山」がほぼ同一の話であるなど、「どちらにも入るといふ性質のもの」は「勿論、色彩が濃く、そして秤量の重い方へ屬せしめた」と述べるこの分類にあつて、こうした不徹底があちこちでなされているのは致命的だ。さらに「六十二の祝」は題名の通り六十二歳の祝いの「○説明話」にもなっているなど、分類の陥穽は否めない。

この点を野村純一は『柳田國男未採撰昔話聚稿』の「註解ノ一ト 武藤鉄城」の項で厳しく指摘する。

さきの太田雄治の一文「飯倉註・「太田一九七五」を指す」を引くまでもなく、武藤は久しくその郷里にあつて、しかもある時期には集中して昔話研究に没頭した。それにもとづく旧「羽後角館地方昔話集」における独自の「分類法」は、その意味では鉄城自身の在地の思想を問う方法でもあつた筈である。「分類」とは「分類」そのものが学問への方法であつて、目的の無い分類は分類として値しない。何故ならば「分類」とは、そもそもがそこでの研究を体系付けるがための方法であり、かつ作業であるからにはかならない。哲理であると理解してよい。それからしてこのとき、武藤鉄城提案の「分類」が、こうした思念の下になされていなければ、それは彼が単に「提

案のための提案」を試みたに過ぎず、研究者としては当然、自己破滅、もしくは自己崩壊を遂げたとして評価されまい。

〔野村二〇〇二〕

「旦那芸の甘さ」と言ったら言葉が過ぎるだろうか。当時であつて斬新で柔軟な着眼点を持つていた鉄城の分類は、本来、分類という作業仮説が根底に持つべき体系を築きえぬままの、直覚的な思考による印象批評に留まつてしまい、鉄城の興味もいつしか他に移つてしまつたという感が強い。

一言で言つてしまえば、鉄城の分類は失敗であつたろう。しかし失敗から学ぶべきことは多い。鉄城の試みた「話型」によらない昔話分類」には、口承文芸研究を新たな段階へと開く未知数の可能性が残されている、はずだ。

## 注

(1) 両辞典の「Japan Knowledge」(<http://www.japanknowledge.com/>) 掲載の増補版によつた。

(2) 二〇〇五年九月十七日～十二月二十三日。同館は角館出身で新潮社創設者の佐藤義亮の記念館である。

(3) 『武藤鉄城著作集Ⅰ 鳥・木の民俗』『武藤一九八四』は、『羽後角館地方に於ける鳥獣草木の民俗学的資料』の増訂版として計画された『自然と伝承』全四巻のうち、刊行された「鳥の巻」(日新書院、一九四三)と草稿「木の巻」を収録している。

(4) こうした、学校という〈場〉を通して「声」を採集する実践の第一人者として、鈴木棠三がいる。本書特集「鈴木棠三」を参照。

(5) 太田の昔話はすべて祖母からの伝承であつた。その事情が柳田に伝われば、あるいはアチックから『羽後角館昔話集』が刊行されていたかもしれない。詳細は「编者ノート」〔太田一九七五〕参照。『武藤鉄城研究』(稲一九九三)三〇頁の図によるとこの草稿は紛失の憂き目にあつたらしいが、本文中に詳しい記載がないため詳細はわからない。

(6) 「昔話の終り」〔武藤一九四一a〕稿末に「编者曰、右は武藤氏が採集せられた、羽後角館地方昔話集(未刊)百九十一話の内からそのエピソードの部分だけここへ転載させて頂いたのである。」とある。『全国昔話資料集成12 角館昔話集』〔武藤一九七五〕はこの数話を旧に復する形で編集されている。

(7) 昔話の採集において「声」とらえ、記す技術を精緻なものとする試みとして、昔話採集に速記術を用いた岩倉市郎や、テープレコーダーを用いた昔話採集を行った丸山久子らの実践がある。本書特集「岩倉市郎」「丸山久子」を参照。

引用・参考文献

- 稲雄次『武藤鉄城研究』一九九三 無明舎出版
- 太田雄治「編者ノート」『全国昔話資料集成12 角館昔話集』一九七五 岩崎美術社
- 佐々木喜善『聴耳草紙』一九三一 三元社
- 関敬吾ほか『日本昔話大成』一九七八～一九八〇 角川書店
- 高橋文太郎『秋田マタギ資料』一九三七 アチックミュージエ  
アム
- 富木耐一「解説」『武藤鉄城著作集Ⅰ 鳥・木の民俗』一九八四 秋田文化出版社
- 富木友治「物故者紹介 武藤鉄城」『日本民俗学大系』5  
一九六二 平凡社
- 野村純一「解説」『全国昔話資料集成12 角館昔話集』一九七五 岩崎美術社
- 野村純一「柳田國男未採択昔話聚稿」二〇〇二 瑞木書房
- 武藤鉄城「羽後角館地方に於ける鳥獣草木の民俗学的資料」一九三五 アチックミュージエアム
- 武藤鉄城「秋田郡邑魚譚」一九四〇 アチックミュージエアム
- 武藤鉄城「昔話の終り」『旅と伝説』一四―一 一九四一 a  
三元社
- 武藤鉄城「羽後角館地方昔話集」(一)(二)『旅と伝説』一四  
―五、六 一九四一 b 三元社
- 武藤鉄城『秋田マタギ聞書』一九六九 慶友社
- 武藤鉄城『全国昔話資料集成12 角館昔話集』一九七五 岩  
崎美術社
- 武藤鉄城『武藤鉄城著作集Ⅰ 鳥・木の民俗』一九八四 秋  
田文化出版社
- 柳田國男『日本昔話名彙』一九四八 日本放送協会  
(いいくら・よしゆき／國學院大學大学院特別研究生)